

おおさか
KEY
ワード
第40回

地下鉄80周年のミニドラマ

いまに伝わる鉄道マン魂と風流



写真：心斎橋駅にある清水熙のレリーフ



写真：映画「大大阪観光」(1937年)の地下鉄の場面

昭和8(1933)年、梅田と心斎橋の間に大阪市営高速鉄道が開通した。日本最初の公営地下鉄である。今年はその記念の80年目にあたる。

大正14(1925)年の第二次市域拡張で大阪市は、東京市を抜いて日本第1位、世界第6位のマンモス都市“大大阪”になる。關一市長のもと現代にいたる都市基盤や文化施設が整備され、御堂筋の拡幅工事と連動して御堂筋の下に地下鉄が建設される。最初は仮駅だったが、梅田も心斎橋もすぐに天井がアーチになった駅が竣工する。将来の大阪発展を見越した豪華な駅で、開通時は短い車両が長いホームにポツンと停車していたのが、いまでは当初の予測を越えて窮屈なほど利用客であふれている。

地下鉄を建設したのが、当時の大阪市電気局であった。電気局は「電燈事業」と「電車及び自動車運輸事業」の二大事業を所管し、局内は「主計」「運輸」「電燈」と「臨時高速鉄道建設」に分かれていた。

中之島や道頓堀で河川をくぐるなど難工事であり、大阪市交通局が昭和レトロ映像として発売するDVDには苦難の映像がまとめられている。いかに大事業であったか伝えるのが、心斎橋駅の大丸側の出口近い駅構内にとりつけられた《清水熙君之像》の銅板レリーフである。清水は高速鉄道建設担当部長であり、銘文末尾に「昭和十一年八月電気局同志敬誌」と刻まれている。電気局の有志が偉業を讃えてレリーフを寄贈したことに、地下鉄建設の大変さと市の鉄道マンの意地や団結力がひしひしと伝わる。

一方、地下鉄開通記念に「大大阪地下鉄行進曲」が作られた。作曲の橋本國彦は北野中学校(現・府立北野高校)から東京音楽学校に学び、同校教授となった作曲家だが、作詞の平塚米次郎は誰あろう、当時の電気局長である。昭和4(1929)年に大阪通信局長から市に移り、昭和11(1936)年まで電気局長を

つとめている。四ツ橋の電気科学館に、東洋で最初のカールツァイス社製プラネタリウムⅡ型をいれた局長としても知られる。

「大大阪地下鉄行進曲」のメロディーはインターネットでも聞くことができるが、

「水の都の地の底までも
進む文化の輝くところ
拓く軌道は浪華のほこり
讃えよ地下鉄スピード時代」

とある歌詞の、最後のメロディーが「スピード時代」を賛美しながらも、なんともんびりしてレトロな気分を満喫させる。

同じコンビでの

「春の花かえ乗場のサイン
つい誘われて地下鉄へ
ナント結構な乗心地」

という「大阪地下鉄小唄」もあり、この局長、役人臭くないというか、作詞のできる趣味人であった模様である。

面白いのが、昭和12(1937)年に大阪市電気局と産業部が制作した映画「大大阪観光」(交通局でDVD販売)だ。「大大阪地下鉄行進曲」がバックにながれるなか、開通したばかりの地下鉄の車両で、振り袖の令嬢たちと談笑する帽子の紳士がいる。写真で比較すると平塚米次郎と似ている。そして別の紳士が女性に席を譲るが、面長で口髭の特徴ある容貌は清水熙そのひとらしい。

安全快適に乗客を運ぶ公共交通において、いまでも昔も乗客の乗車マナーの啓発は大切であった。最近「歩きスマホはやめてね。」というポスターを地下鉄でよく見かける。ミスター地下鉄とも言える平塚局長と清水部長が、率先して乗車マナーの啓発シーンに登場するのはありえない話ではない。

開通80年と今日の地下鉄の発展を、彼らもきっと喜んでいるだろう。